

楽器の生命

小川未明

青空文庫

音楽おんがくというものは、いったい悲かなしい感かんじを人々ひとびとの心こころに与あたえるものです。いい楽が器つきになればなるほど、その細こまかな波は動どうが、いつそう鋭するどく魂たましいに食い入いるように、ますます悲かなしい感かんじをそそのるのであります。そして、奏かなでる人ひとが、名手めいしゅになればなるほど、堪たえがたい思おもいがされるのでした。

愉快ゆかいな楽が器つきがあつたら、どんなに人々ひとびとがなぐさめられるであらうと、ある無む名めいな音おん楽が家かは考かんえました。

その人ひとは、どうしたら、愉快ゆかいな音ねが出でるか、いろいろに苦く心しんをこらしたのです。そして、笛ふえや、琴ことのような、単たん純じゆんな楽が器つきでは、どうすることもできないけれど、オルガンのように、複ふく雑ざつな楽が器つきになつたら、なんとかして、その目も的てきが達たつせられは、しないかということ考かんえたのです。

彼かれは、日にち夜や、いい音ね色いろが出でて、しかも、それがなんともいえない愉快ゆかいな音ねであるには、どうしたら、そう造つくられるかということに研けん究きゆうを積つんだのであります。彼かれは、最さい初しよ、純じゆん金きんの細ほい線せんでためました。しかし、その音ね色いろは、あまりに澄すんで、冴さえきつています。つぎに、金きんと銀ぎんと混こんじて細ほい線せんを造つくりました。これは、また、調ちよう子しが高たかいばかり

で、愉快な音ということができませんでした。

それから、幾たびも失敗して、長い間かかって、やっと、彼は、鉄と銀とを混合することによって、ついに、愉快な音色を出すことに成功しました。

彼は、この鉄と銀とからできた、一筋の線をオルガンの中に仕掛けました。すると、

このオルガンは、だれがきいても、それは、愉快な音が出たのであります。

心を愉快にする、たとえば、いままで沈んでいたものが、その音を聞くと、陽気になるということは、たしかに、いままでの音楽とは、反対のことでした。これなら、どんな神経質な子供に聞かせても、また、気持ちのつねに滅入る病人が聞いても、さしつかえないということになりました。

けれど、ただ一つ困ることには、こうしたオルガンは、たくさん造られないことです。ただ一つの機械にはされなかつたので、鉄と銀とで、できた一筋の線は、この音楽家の手で鍛えられるよりは、ほかに、だれも造ることができなかつたからです。それは、火の加減にあつたとばかりいうことはできません。まったく、この人の創作であつたからであります。

ある日、金持ちのお嬢さんは、外国の雑誌でこのオルガンの広告を見ました。

無名の音楽家は、このりっぱな発明によって、すでに有名になっていました。そして、その人の手で造られた、オルガンは、ひじょうな高価のものでありました。お嬢さんは、病気のため海岸へ保養にいつていました。そして、そこで、この広告を見たのであります。

それだけでなく、さえ気が沈んで、さびしいのを、毎日、波の音を聞き、風の並木にあたる音を聞くと、いつそう気持ちが滅入るのでした。それは、けつして、病気にとつていいことでありませんでした。

お嬢さんは、音楽が好きでしたから、こんなときに、バイオリンか、琴が弾いてみたいと思いましたが、医者は、かえつて、神経を興奮させてよくないだろうといつて、許さなかつたのです。その医者は、音楽と神経の関係をば、かなり深く心得ていたからであります。

「ここに、こういう心を愉快にする、オルガンがありますよ。」と、お嬢さんは、雑誌の広告を、まだそう年寄りでない医者に見せました。

医者は、黙つて、しばらくそれを見ていましたが、驚いたというふうで、

「お嬢さん、もしこれがほんとうなら、音楽界の革命です。」と、いいました。

お嬢さんの顔は、青白くて、目は、澄んでいました。その目で、じつとこちらを見て、「そうした革命はあり得ることです。なんで私たちが、それを信じてはならないというはずがありましょう。」と、お嬢さんは、答えました。

「いやまったく、それにちがいありません……。」と、医者は、いうよりしかたがなかつた。

彼女は、高価な金を出して、そのオルガンをお父さんから買ってもらうことにしました。それほど、お嬢さんは、このオルガンに憧れました。海を望みながら、はるか、異国の空の下で、この愉快な音を出す楽器が、何人かによつて奏でられたり、また、この楽器が鳴りひびく夜が、ちようどいい月夜で、街の中を歩いている人たちが、歩みをとめて、しばらく、そばの建物の中からもれる、オルガンの音色に聞きとれている有り様などを想像せずにはいられなかつたのであります。

あちらの国から、オルガンが着きましたときに、お嬢さんは、どんなに喜んだであります。それから、毎日、毎夜、オルガンを鳴らしていました。

それは、ほんとうに、愉快な音色でありました。ちようど、柔らかな土を破つて、芽がもえ出るような喜びを、きく人の心に与えました。

浜の人たちは、このオルガンの音を聞いてから、夜も、うかれ心地になって、波打ちぎわをぶらぶら歩くようになりました。

「こんなに、魚が跳ねることは、めつたにない。あのオルガンの音がするようになってからだ。」と、漁師で、いったものもありました。

お嬢さんは、病氣ということを忘れて、夜もおそくまでオルガンを弾いていました。お父さんは、そのことを心配しました。そして、医者に、どうか注意してくれるようにと申されました。

医者は、たとえ、なんといつても、お嬢さんがいうことをきかないのを知っていましたから、当惑してしまいました。

「お嬢さん、夜、窓を開けて、そうして、いつまでも、オルガンをお鳴らしになるのは、いけません。」といいました。

「わたしは、あの波の音と、いま調子を合わせているのですよ。魚が、浮かれて跳ねると、浜の人たちはいつています。」と、お嬢さんは、怒りっぽい声で、音楽のほうに、気をとられていいました。

「いえ、お嬢さん、海の方から吹いてくる潮風で、オルガンがいたむからいったのです

。「と、医者いしやは、答えこたました。

彼女かのじよは、オルガンがいたむときいて、はじめてびっくりしました。

お嬢じやうさんは、病びやうき気がよくなるらないで、とうとう死しんでしまいました。そして、このオルガンは、この村むらの小学しょうがっこう校へ寄付きふすることになりました。

校長こうちやうは、どんなに喜よろこんだでしょう。また、音楽おんがくの教師きやうしは、どんなにこのオルガンを弾ひくのをうれしがったでしょう。

「みなさんは、この上じやうとう等のオルガンに歩調ほちやうを合あわせて愉快ゆかいに体操たいそうをすることもできれば、また、歌うたうこともできます。」と、先生せんせいは、生徒せいとらに向むかっていいました。

小学しょうがっこう校は、小高こだかいところがありました。学がっこう校の窓まどからは、よく紫むらさきいろ色の海うみが見みえました。窓まどの際きわには、オレンジの木きがあつて、夏なつは、白しろい香かおりの高たかい花はなが咲さきました。そして、秋あきから冬ふゆにかけては、真まつ黄きいろ色いろに実みが熟じゆくしたのであります。

若わかい女おんなの教師きやうしは、日ひが暮くれるころまで、独ひとり学がっこう校のこに残のこつてオルガンを鳴ならしていることがありました。また、男おとこの教師きやうしも、おそくまでこのオルガンを弾ひいでいることがありました。オルガンの愉快ゆかいな音色ねいろは、紫むらさきいろ色の海うみの上うへまでころげてゆきました。この樂が器きで体操たいそうや、唱しょうか歌かをならつた子供こどもらは、いつしか大おおきくなつて、娘むすめたちは、お嫁よめさん

になり、男は、りつぱに一人まえの百姓となりました。けれど、その人たちは、子供の時分にきいた、愉快なオルガンの音をいつまでも思い出したのであります。

長い年月の間に、学校の先生は、変わりました。けれど校長だけは、変わらずに、勤めていました。しかし、もう頭ははげて、ひげは白くなっています。

「みなさん、この学校のオルガンは、上等な品で、だれでも、この音をきいて、愉快にならないものはありません。みなさんも、毎日、このオルガンの音色のように、気持ちさをさわやかに、この音色といっしょに歩調を合わし、また、勉強をしなればなりません。」と、校長は、生徒らを集めていったのです。

唱歌の先生は、校長のいったことを、まことにほんとうであると思つていますが、小さな生徒らは、この学校のオルガンを、けつして、愉快な音の出るものだとは、信じていませんでした。

家に帰つて、この話をお父さんや、お母さんにすると、「おお、学校のオルガンは、有名なものだ。」と、感歎しましたが、しかし、子供たちは、どういふものか、そのオルガンを愉快とも、なんとも思つていませんでした。

これは、どうしたことでしょう？

もし、このオルガンを送った、年とつた音楽家が、このオルガンの音色を聞いたら、すべてがわかることです。そして、きつとそのとき、つぎのようにいったでしょう。

「小さなものの耳は、たしかだ。ほんとうに、子供たちのいうとおり、このオルガンは、愉快な音がしない。こわれているからだ。しかし俺には、もう、それを新しく造るだけの気力がなくなつた。このオルガンの役目は、これまでに十分果たしたはずだ……。」

鉄と銀とで造られた、一筋の線は長い間海の上から吹いてくる潮風のために、いつしかさびて、切れてしまつたからです。たとえこの線は切れても、オルガンは鳴つたのでした。ただ、その証拠に、もはや、このオルガンの音色が海の上をころがっても、魚が、波間に跳ねるようなことはなかつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 ㊦ 講談社

1977 (昭和52) 年2月10日第1刷

1977 (昭和52) 年C第2刷

底本の親本：「ある夜の星だち」イデア書院

1924 (大正13) 年11月20日発行

初出：「随筆」

1924 (大正13) 年4月

※表題は底本では、「楽器《がつき》の生命《せいめい》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：館野浩美

2019年1月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

楽器の生命

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>